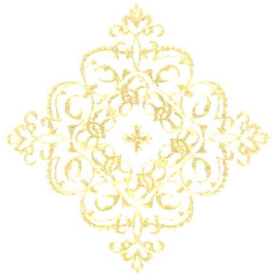

A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

31

ショーロホフ

静かなドン I 米野忠夫訳

蔵書

中央公論社

新集 世界の文学 31 ©1970

ショーロホフ

訳者 水野忠夫

昭和45年7月25日初版印刷
昭和45年8月5日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

暁のドン河　ロシア南部のドン河流域にひろがる肥沃地帯は、『静かなドン』の主役になるコサックの故郷である。グリゴーリイ・メレホフが生まれ育ったのは、この写真のヴョーシェンスカヤ村であった。（撮影　Ｍ・デニセンコ）

ショーロホフ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

目次

静かなドン　I　3
解説　579

静かなドン　I

栄えあるわれらのこの土地は、犂では起こされず……
われらの土地は馬の蹄で切り開かれた、
栄えあるこの土地に播き散らされたのはコサックの頭、
われらの静かなドンを飾るのが若後家ならば、
われらの父、静かなドンを彩るのは、みなし児たちだ、
静かなドンの波にあふれているもの、それは父の涙に母の涙。

おお、われらの父、静かなドンよ！
おお、静かなドンよ、どうしてそんなに濁っているのか？
ああ、静かなドンがどうして濁らずにいられよう！
静かなドンの河底に冷たい泉が湧き出ていても、
静かなドンの白い魚たちが水をかき濁すのだ。

古代コサック民謡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

第一巻

第一部

一

メレホフの家は部落のいちばんはずれにある。狭い道が家畜小屋のくぐり戸のあたりから北に向かい、ドン河へと通じている。緑色に苔むした白堊の岩間に沿って急な坂を十五メートルほど下って行くと、すぐに河岸に出るが、そこには、真珠を散りばめたようなまばゆい貝殻と、波に洗われて丸みをおびた小石を敷きつめた曲がりくねった灰色の河縁があり、そのさきには、風を受け、どす黒い波頭を立てて逆巻くドンの奔流がある。東には、打穀場をとりかこむ柳の編垣の外を走っているゲトマン街道、白っぽいにがよもぎ、馬の蹄に踏みにじられてもなおしたたかに息づいている褐色のおおばこ、街道が二つに分かれる地点に立っている小さな礼拝堂、そしてさらにその向こうには、陽炎のゆらめく曠野がある。南から迫ってくる白堊の山脈。西には広場を突っ切って河原にいたる部落の通りがある。

コサックのプロコーフィイ・メレホフは、この前の、さらにもうひとつ前のトルコとの戦争（一八七七―七八年の露土戦争のこと）のさなかに部落へ帰ってきた。ショールにすっぽりと身をくるんだ小柄な女を妻としてトルコから連れてもどってきたのだった。この女はいつも顔を隠したきりで、憂いにみちた野性的な瞳を人目にさらすことはめったになかった。絹のショールは遠い見知らぬ国の香りをただよわせ、その虹色の模様は土地の女たちの羨望の的となったものである。囚われのこのトルコ女は、プロコーフィイの身内の者にたいしてすらよそよそしい態度をとりつづけ、そのため、プロコーフィイの年老いた父親は、ほどなくして息子を別居させた。トルコ女から受けた侮辱を忘れられなかったのか、彼は死ぬまで息子の家の敷居をまたごうとはしなかった。

プロコーフィイはまもなく自分の家を建てたが、丸太づくりの母屋は大工たちに作らせ、家畜小屋はみずからの手で仕切り、そして秋が近づいたとき、異国生まれの猫背の妻を連れて新居に引き移った。家財道具を積んだ荷馬車のあとから二人が部落のなかを歩いて行くと、おとなも子供もみな通りに飛び出してきた。コサックたち

はひそかに二人を嘲笑し、女どもは甲高い声で叫びかわし、顔じゅう泥だらけにした薄汚ないコサックの子供たちは、物見高くプロコーフィイのあとをぞろぞろ追いかけては声をかぎりにはやしたてるのであったが、しかしプロコーフィイは、コサック外套をひっかけただけで、あたかも畑の畦道でも歩くみたいにゆっくりと足を運び、黒い掌に妻のほっそりとした手首を握りしめ、白髪まじりの前髪を垂らした頭を反抗的に持ち上げて、頬骨の下にもりあがった筋肉を痙攣させ、ふだんは微動だにせぬ石のような眉間にじっとりと汗をにじませているばかりだった。

このとき以来、プロコーフィイの姿は部落ではほとんど見かけられなくなり、寄合いにも顔を出さなくなった。ドンの流れを見おろす部落のはずれにある家に閉じこもったきり、だれとも付き合いをせず、ひっそりと暮らしはじめたのである。彼に関する奇怪な噂が部落じゅうに流れた。牧場への道すがら、仔牛に草を食べさせていた牧童たちは、毎日、夕焼けの色があせはじめるころに、彼が妻を腕に抱きかかえてタタール人の墳墓となっている小高い丘まで運ぶならわしになっているのだと、見てきたような話をした。プロコーフィイは、丘の頂上で妻をおろし、幾百年もの歳月に風化し、穴だらけになった墓石に背中をよりかからせると、自分もその隣に腰をおろし、そうしてそのまま、二人して曠野をいつまでもみつめているということだった。夕焼けがすっかり消えてしまうまで、じっと曠野をながめつづけ、それからプロコーフィイは妻を外套でくるみ、両腕に抱きかかえて家に運んで帰るという。このような奇妙な振舞をなんと説明したらよいものやら、部落の者は判断に苦しみ、女たちは明けても暮れてもこの話に熱中し、ほかのことには手がつかないほどであった。プロコーフィイの妻についてもいろいろと取沙汰され、彼女が絶世の美女であると断言する者がいるかと思えば、それとは正反対のことを言いだす者も出てくる始末だった。結局、この問題は、部落の女たちのなかでもいちばん向こう見ずな、マーヴラという兵隊後家が、新しい麹をもらいに行くふりをしてプロコーフィイの家に駆けつけてのち、いっさいの解決をみた。プロコーフィイが麹を取りに穴蔵に降りて行っているあいだに、マーヴラは、なんの取柄もないトルコ女に彼がひっかかってしまったのだということを見抜いたのである……

しばらくすると、顔をまっ赤にしたマーヴラが頭布を横っちょにかぶって、横町に集まった女たちを前にして、あることないことを吹聴した。

「ねえ、おまえさんたち、あの人ったら、いったい、あの女のどこがよいというのかね？　せめて十人なみの女

ならともかく、なにもあんな女と……あの女ときたら、前から見ても、うしろから見ても、いいところなんかちっともなくて、それこそ、見ているほうが恥ずかしくなるくらいなんだよ。ここらの娘っ子たちだって、あれよりはまだましさ。黄蜂みたいで、胴のところから二つに折れてしまいそうだし、おまけに目といえばまっ黒で、ぎらぎらしているんだから、あの目でじっとみつめられたら、悪魔にでもにらまれたみたいな気がしてくるよ、ああ、たまらない。それに、もうじき子供ができるみたいなんだよ、きっとそうにちがいない」

「おなかが大きいのかい？」女たちは驚いた。

「どうやら男の子らしい、これでも、三人の子供を育ててきたんだから、あたしの目に狂いはないよ」

「それで、顔はどうなんだい？」

「顔かい？　まっ黄色だよ。目はどんよりとにごっているけど、やはり、知らないところで暮らすのはらくではないんだろうよ。それからね、おまえさんたち、あの女がなにをはいていると思う？……プロコーフィイのズボンなんだよ」

「へえーえ……」女たちはいっせいに驚嘆の叫びを上げた。

「この目でちゃんと見てきたんだよ、ほんとうに亭主のズボンをはいていたんだから、ただ、縁にコサックの縫取りはしていなかったけど。きっと亭主のふだんばきをいただいちゃったにちがいないよ。おまけに、だぶだぶの長いシャツなんか着てさ、裾を靴下に突っ込んだズボンがそのシャツの下からはみ出していたよ。それを見るなり、あたしは胸糞が悪くなってしまってね……」

プロコーフィイの妻は魔女だという噂が部落でひそひそと囁かれるようになった。アスターホフ家の嫁が（アスターホフ一家は、部落でもプロコーフィイの家にもっとも近いところに住んでいた）神に誓ってまちがいないと前置きして語ったところによると、聖霊降臨祭の二日目のこと、まだ夜の明ける前に、プロコーフィイの妻が頭になにもかぶらず、はだしのままでアスターホフの家の牛小屋に来て、牝牛の乳を搾っているのを目撃したというのである。そのときから、その牝牛の乳房は子供のこぶしぐらいにしなびてしまい、乳が出なくなって、まもなく死んでしまったとのことであった。

その年には、かつてなかったほどたくさんの家畜が疫病にかかって死んでいった。ドン河のほとりの牛小屋では、くる日もくる日も、牝牛や仔牛の死骸が砂地の浅瀬にどす黒い跡を残したものである。疫病は馬のあいだにもひろまっていった。コサック村の牧場に遊ぶ馬の群れがしだいに少なくなった。そこでまたしても、部落の通りや横町には黒い噂が流れ出したのであった……

コサックたちが部落の寄合いからプロコーフィイの家にやってきた。

主人は玄関の階段の上に出てきて挨拶した。

「これはこれは、みなさんおそろいで、なんのご用です？」

人々は階段の下まで押しかけてはきたものの、言葉もなく黙りこんでいた。

ついに、ほろ酔い機嫌の老人が口火を切って叫んだ。

「おまえのとこの魔女をここに引っぱってこい！　裁判にかけてやる！……」

プロコーフィイはさっと家に引き返そうとしたが、玄関のところでみなに追いつかれた。リュシニャ（荷馬車の梶棒）という綽名でとおっている砲兵あがりの大男が、プロコーフィイの頭を壁に押しつけながら言った。

「騒ぐな、騒ぐんじゃねえ、心配することなんかないさ！……おまえには手をかけやしねえ、ただ、おまえのところの女房を土のなかに埋めてしまおうというだけだ。牛や馬がいなくなって部落全体が滅びてしまうよりは、あの女をぶっ殺したほうがまだましだからな。だから、おまえはおとなしくしていろ、さもないと、壁にぶつけて頭を打ちくだいてやる！」

「女を出せ、牝犬を庭に引きずり出せ！……」階段のところでみんなが口々にがなりたてた。

プロコーフィイと同じ連隊にいた男が、片手にトルコ女の髪を巻きつけ、もういっぽうの手で、泣き叫ぼうとはり裂けんばかりに大きく開けた女の口をしっかりと押えながら、飛ぶようにして玄関の外に引きずり出し、群がる人々の足もとに投げつけた。引き裂くような女の悲鳴が怒号とどよめきのなかを貫いた。

プロコーフィイは六人のコサックを投げ倒して部屋に駆け込むや、壁に掛かっていた長剣を手に取った。コサックたちは押し合いへし合いしながら玄関から飛び出した。ぎらぎらと閃光を放ってうなっている長剣を頭上に振りかざして、プロコーフィイは階段を駆けおりた。人人は震えあがって庭に逃げ散った。

納屋のそばをのろのろと走っていた砲兵あがりのリュシニャに背後から追いつくと、プロコーフィイは左の肩から腰にかけて袈裟がけに斬りつけた。ほかのコサックたちは垣根の杭を押し倒し、打穀場を通り抜けて曠野へと逃げ去った。

三十分ほどすると、元気をとりもどした群衆がふたたび屋敷に押し寄せてきた。様子をうかがうために、二人のコサックが身をちぢめながら玄関に忍び込んだ。台所の敷居の上に、プロコーフィイの妻がぶざまに頭をのけぞらせ、血まみれになって横たわっていたが、苦しげにむき出した歯のあいだからは、噛み切られた舌がひくひ

くと動いていた。プロコーフィイは頭をうち振り、じっと目を見はって、泣き声をあげている小さな塊を山羊皮の外套でくるんでいたが、それは月足らずで生まれた赤児であった。

*

プロコーフィイの妻はその日の夕方に死んだ。未熟児を不憫に思ってか、祖母にあたるプロコーフィイの母親がその子を引き取ることとなった。

蒸した麩にくるみ、馬乳を飲ませて赤児を育て、それからひと月ののち、トルコの血を受けた色の浅黒い男の子が無事に育ちそうな見通しがつくと、教会に連れて行って洗礼を受けさせた。祖父の名をとってパンテレイと名づけられた。プロコーフィイが懲役からもどってきたのは、それから十二年の歳月を経たあとのことである。白毛まじりの赤茶けた顎ひげを短く刈り込み、ありきたりのロシア服を着てきたために、コサックとはとても思えないような風貌となっていた。彼は息子を引き取り、家業に精を出しはじめた。

パンテレイは成長するにつれて、色のまっ黒な血気さかんな若者となっていった。顔立ちも、すらりとしたからだつきも、母親とそっくりだった。

プロコーフィイは、近くに住むコサックの娘を息子の嫁にした。

このとき以来、トルコ人の血がコサックの血に混じり合うようになった。かくして、鉤鼻で野性的な美しさをたたえたコサック、トルコ人という綽名で呼ばれるメレホフの一族が部落のなかでもひときわ目立ちはじめるようになったのである。

父親を埋葬したあと、パンテレイは家業に没頭し、屋根を新たに葺きかえ、それまで遊ばせておいた土地を半ヘクタールほど宅地にまわし、そこにブリキ屋根の納屋と物置とを新築した。主人の注文で、屋根屋はブリキの切れ端で二羽の雄鶏を作り、それを納屋の屋根に取りつけた。この雄鶏のくつろいださまが、なに不自由ない裕福な感じをメレホフの屋敷全体に与え、楽しい雰囲気をかもしだした。

パンテレイ・プロコーフィエヴィチは、老年になるにつれてますますかくしゃくとなってゆき、横にふとりだし、やや猫背になったとはいえ、それでもやはり均整のとれた老人と見えたものである。骨ばっていて、歩くときにはびっこを引いたが（若いとき、天覧競馬で左脚を骨折したためである）、左の耳に半月形の銀の耳輪をつけ、その年になっても、髪の毛とひげは黒々としていて、癇癪を起こしたら最後、前後の見さかいもなくなるほどで、おそらくそのためででもあろうか、かつては美しか

った彼の妻が、年よりも早くふけこみ、いまでは顔じゅうが蜘蛛の巣みたいな深い皺におおわれ、でっぷりとふとりだしてしまっていた。

すでに家庭を持っていた長男のペトロは母親似で、背はさほど高くなく、獅子鼻で、よく伸びた朝顔の蔓を思わせる小麦色の髪をし、茶色の目を持っていたが、次男のグリゴーリイは父親にそっくりで、ペトロよりも六歳も年下だったのに、背は頭半分だけ高く、父親と同じ垂れ下がった鉤鼻の持主で、やや吊り上がった目には青みをおびた瞳がやさしげに燃え、鋭く突き出た頬骨は赤みがかった褐色の皮膚でおおわれている。グリゴーリイもまた父親と同じく少しばかり猫背で、しかも微笑までも、この二人にはどことなく共通する獣的なところがあった。

父親の気に入り娘で、手のすらりとした、瞳の大きな少女ドゥニャーシカ、それにペトロの妻ダーリヤと乳飲児、メレホフ家の家族はこれですべてである。

二

夜明け前の灰色の空にまばらに星がまたたいていた。低く垂れこめた黒い雲の下からは風が吹きつけている。ドンの河面にたちこめた霧は白堊の山々の斜面にいくつもの層を織りなして流れ、そうして、頭のない蛇のように断崖へと這いおりてくる。ドンの左岸にある砂州、小さな入江、葦の生い茂った深い沼、露に濡れた林、これらすべてのものが、冷たく心まどわす朝焼けに燃えはじめていた。太陽はいまだ昇らず、地平線のかなたで身悶えしている。

メレホフの家でいちばんさきに目をさましたのはパンテレイ・プロコーフィエヴィチだった。歩きながら十字の刺繍のほどこされたシャツのボタンをとめると、表階段に出て行った。一面に草の生い茂った庭には、銀色に光る露がおりている。家畜を細い道に出してやった。下着を引っかけただけのダーリヤが牝牛の乳を搾りに駆けだして行った。素足のまっ白なふくらはぎのあたりに露の玉が初乳のようにはねかかり、牛小屋へとつづく裏庭の草の上にかすかに足跡が残った。

パンテレイ・プロコーフィエヴィチは、ダーリヤの足に踏みしだかれた草がふたたびまっすぐになってゆくさまをじっとみつめていたが、やがて部屋に入った。

開け放された窓敷居の上に、散りはじめた庭の桜の花びらがいくつか、生気なくばら色に見えている。グリゴーリイは片手を投げ出し、うつぶせになって眠っていた。

「グリーシカ、釣りに行かんか？」

「なんだって？」グリゴーリイは聞きとれないくらいの声でたずねると、寝台から両足を垂らした。

「おい、行こう、朝釣りにな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb